



栗のついで
林田
李兩
菊撰



俳諧そ秋の論序



かゝのそとく生死の如くひくはるや
なりたし解梨あるそはいふ心や
ちり不易流りとなれ去年と
あらしとあしとなり羅来正居まの
十三回忘とな家世のもの節後
あらしとい無と母一にくと生らせよ
わしの死を死余あし願識ちあ
識しといま人あはけはそこれま人と

中侍らんきあへ誠字白くひき
ふりあへこれまが戸はあまの
とをたぐみあへとて故よき
能い乃きくひはとの風雅と
為まや居たまれをされひ
誠字謙にへこひあひお
あまの物あやうも秋のはま乃
あわれや居たまれをされば
あまの

我士志多為なれを志き好く
をの信へるも増のおとを
春秋乃誠をあへきり
はなまき乃誠字の誠
かひ誠のま向まのあま
なれへとまきさりへ番を
おへる孝雨外菊られ
韻へ法さへあはれ

天明四甲辰年秋七月

青蘿

昔高しめまねくん月や秋のそく
 野を益蘭盆乃のよまむ笛 李雨
 ふらふら秋を想ふ秋一酒がくく 卧兼
 眠り幾夜及はのさあにま梨 雨人

関の戸れら朽れ世と想ふくん 野上
 高をさきり想く山一帯乃道 怒郷
 盗人の跡がくくたれ物ゆえれ 花朗
 接一力一船舟を川事 画佛
 江戸船の上野おきり花の角 立角
 胡蝶字る夢のしむを結らん 花
 うけらふ乃す川流善を流接く 雨
 水の心舞志漸くおれし 兼

夜も流るる土間へ焚火乃かき
空の依乃勅使乃信石れ侍
童中も連ぶはなると女出あら
栞校小なきの小貝さ梅く
夕月へ鶴乃こつ窓あみし
世分るはれ人守御く方
惟光もさや遠くとねもん
茶漬乃膳をかま衛立

人 上 郷 朗 佛 角 羅 兩

初志ら純本の葉飾りは
夏乃御りし怪麻のく
い川うさきまれ松宮の片こる
志はし一宿の辰左乃袖
算らり風呂場へはな梅の細
亦うこれ婦うさ葛れ夏枯
泣くは次者志のひれ整造の
恋も昔挽のきよりあ家月

菓 人 上 郷 朗 佛 角 蕨

秋を以て秋のあつし乃山高く
 つたふしとてと秋葉の初は
 後つれ乃女房は遠く子世音
 引さく海と志布此わさ帯
 庭と母に懐の白字信とをさく
 よき日詩き流美の棟上へ
 是之言の誠一花の美くせ
 十と舞にのち詩春の園伽汲
 華 蘿 朗 郷 上 人 菊 雨

捻香

中を以てあつし乃山の秋
 西に如れと秋のあつし乃山
 云家字盡は秋の美佛の美
 秋好のなまに吟きり秋の美
 園伽汲と塚へせしもを秋の美
 塚乃秋と秋の美ものいふあつし
 乃津へや昔婦詩塚へ秋の美
 李 雨 外 菊 野 上 人 郷 朗 角

温故

花朗

五角

西の月は次塚乃言仏が 画佛

かく進福乃言、心字筆字歌
流の竹素乃言、心字筆字歌
巻の竹四季筆字亦心字歌
心字筆字の心字筆字

牛表舎

飛石字流筆母と十餘家

橋字の筆流と

二三家入の教洞の

牛に流の歌

雨人

乃乃夜や言より不事一啼の鶴

植田に五枚さあ山かけ 音羅

鳥の入歌歌に想の片流り高 李雨

鞠車に歌をいぬれ 人

市之乃こけりもあふ家おの月

うさひのさびく楳乃いろ時

麻子村一と柄も人志知く事

顔馬帽子に西日ほ照くし

里坊を言雄とありく楳ヶ畠

妻のよーわとせとーのの梅

長嘯く梅もあふれく小盃

新羅國乃緋鯉江一程あり

兩 薙 人 為 薙 人 兩 薙

南ふく雲ちらひ川る月此夜に

筋音も梅もさく樂孫も時秋

菊乃芽を吹のくさけ被るあ

牡丹の圃今を捨ち梨

葉とくさ寂き婦り物人花曇り

錢乃止と志の春此日

口十才多難もほる若く川く九

はなふけとく病おく

薙 人 兩 薙 人 兩 薙 人

唾乃鷗なまよ里を撰みきり
 さらばち作歌初め海
 漕つれし舟きりし言部と
 軍にこそよ筆城石侍寺
 十はり播くを体白乃木
 二五葉かくしと舞の約束
 言はくし由良の長命も打破
 緋より赤の徳しと山と順
 人 兩 薙 人 兩 薙 人 兩 薙

御輿かく誦を涼しく月出し
 店し酒のや浪屏の歌
 黙禮を媚しよき侍流り置者
 おりき娘乃唾をちくらん
 志のそは家深川急の川流ふ
 山に志しと未来記を待
 あ乃子の花を世にたけあ
 二けし朝山
 人 兩 薙 人 兩 薙 人 兩 薙

赤穂那波の浦より竹葉舎へ

師乃をくらし侍、俳諧家、加子

うもつけれきこもきこられ

亦ち侍の

音羅

花葛蒲津田乃細江乃たよりらぬ

う籠に縁一里井牛乃子 南外

若もくらの泣よりこを鳴ぶあう 殿文

遠見の人志遠くより 蘿

福あまの福よりかりはる朝の月 外

つ川さてもはるくこも白ま 更

あまのまに紗灸釣あの一もよひ 蘿

神候乃福女出もまねくこ 外

かきこも暖簾をまはるおれりもせ 更

行燈たうおれり油はよまきく 蘿

鐘の音も也條のまきこ流年のこれ 外

夢にまきあれあや乃まきく峯 文

昔明汗をへくをむ海のう
 身を秋せみのるに絶ち
 高れりおし思ふを時古きれ
 と。魂上鞆鼓の柏子をか
 糸いれ一牛も度し思花志中
 山葵乃、いさひ羽織とせん
 む乃加を都へ石舟春なれや
 橋より之こむ門乃あゝ蟻
 外 蘿 文 外 蘿 文 外 蘿

鳩はつら乃鷲古にたれ初
 母なる袖字かきよそ引
 人同志の母葵あり乃高れり
 妻家乃踏次乃不き細戸
 豆腐造りノ貫流乃茶にれ
 空のちのはをり時一に泣
 木ぬるに心一の梨を賣換
 中道一井戸を流る月乃夜
 外 蘿 文 外 蘿 文 外 蘿

花乃まぬよわねの秋風可なり
音蘿
燭石はよや炭乃まぬれし時多し
画佛

夏

生花一庭如わさゆやかぶ川も
怒郷
ま前よりわさねをり想雲雀の巢
茶木
あ鷄ささく町水入り音月夜
野上
白苺子や美人うら海子のいね
音蘿

朝乃るや糸さちまは初茹子
錢氏
みはに扇あきさくま川に水
土並
葛乃糸の海苔うら山清水は
李雨
白雨や岩に碑と歌玉あき
李石
音く乃中又月内を牛婦人
鍛吏
あまりの體を清く海清水に
暮蛤

秋

1
刀研一人吹きり秋の風 李 雨
魂杳く去り月出次小家之れ 花 朗
秋風の真や結梅らん 苦麦の花 怨 郷
八月や今言をたつ花もさう 花 郎
紅葉を待たぬ秋之れ思 五 角

冬

くち切や少き志くれの子さかり 雨 人

梟や夜多何時り月のこ 馬 木
襖着く火燵り心憂けあか 五 角
月出まやわらひと影り言乃杖 野 上
ふしの火や明な川へ流しと満り釜 李 雨
川へ流しやかき流さぬ田乃雪雀 普 羅

世小冊子を蘇乃病と師乃文は多
流少多々冊而庵のあゝ一ははは
蘇一や一一月世にやゝ時ふり
志事満ちあひるなる世一ははは
粟乃少に世やと一は母さあろを
年知くく友もあらの信をもあは
さう若時ものうう世をあはく梓やん

下に流心取事業を物く流心取一
魚ん乃讀誦やも一はは

無印書

京都

檮屋活兵衛板

06
12
29
100月
精衛
天
藤園